2022年 秋号
No.20

市美だより

鹿児島市立美術館｜KAGOSHIMA CITY MUSEUM OF ART

発行 鹿児島市立美術館
〒892-0853
鹿児島市城山町４番36号
TEL(099)224-3400

美術館HP

あなたとわくわく
マグマシティ
鹿児島市

展覧会の会期等はすべて、新型コロナウイルス感染症の地域の感染状況により変更になる場合があります。詳しくは美術館ホームページでご確認ください。

無料開放日のお知らせ

毎月第３日曜日は、小・中学生は無料開放日です。所蔵作品展 ＋ 小企画展を無料で鑑賞いただけます。
10月16日（日）、11月20日（日）…

川瀬巴水

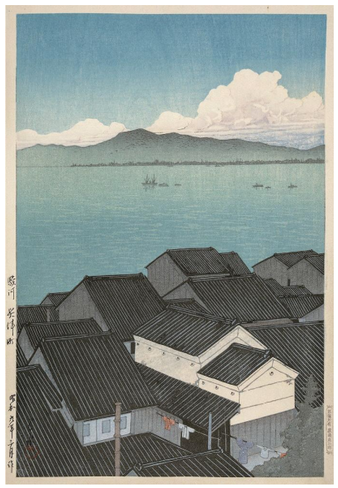
旅と郷愁の風景
Travel and nostalgic landscape

2022 9.30｜金｜-11.6｜日｜

開館時間　9:30～18:00（入館は17:30まで）
休 館 日　10/3（月）、11（火）、17（月）、24（月）

大正・昭和期に活躍した版画家・川瀬巴水（1883〔明治 16〕年ー1957〔昭和 32〕年）。日本全国を旅して、四季折々の風景を叙情的に描いた巴水は、「新版画」を牽引する存在として、人気を博します。

江戸時代に誕生した浮世絵は、明治に入り衰退していきましたが、渡邊庄三郎は自ら版元となり、絵師・彫師・摺師の三者がそれぞれの高度な技術を結集する伝統的な木版技術の復興と普及を目指します。そして、その理想である創作的で芸術を本位とする新しい時代の浮世絵版画「新版画」を提唱します。版元渡邊庄三郎と共に、巴水は新時代の意匠を凝らした画風や新たな手法に挑戦し、伊東深水等と「新版画」を確立させました。



左上：鹿児嶌甲突川 1922　右下：駿河興津町 1934

巴水の創作活動が順調に進んでいた 1923（大正 12）年、関東大震災が発生しました。この震災で庄三郎は作品や版木のほとんどを、また、巴水も写生帖を焼失してしまいます。しかし、巴水の創作への意欲は熱く、庄三郎の勧めもあり、生涯で一番長い旅に出掛け、各地での写生を基に創作を再開します。この頃から、巴水の筆致に変化が生まれ、震災前の作品に比べ、より写実的で鮮やかな色彩の作品が制作されるようになります。

本展覧会では「旅情詩人」とも呼ばれた川瀬巴水の画家としての生涯を、版画の制作を始めた頃から関東大震災が起きるまでの第１章、震災という大きな出来事を経て変化した作風が見られる第２章、そして太平洋戦争前後から晩年までの第３章に分け、代表的な作品と共に紹介いたします。

「旅情詩人」巴水は、訪れた各地の風景と共に、そこに暮らす人々の生活を描きました。巴水の描いた日本の風景を、お楽しみください。

秋の所蔵品展（西洋美術＋郷土作家＋特集コーナー）

ミニ特集：版画のいろは
会期：９月２７日（火）～１２月１１日（日）

木版画家・川瀬巴水の特別企画展（9/30～ 11/6）開催に合わせ、所蔵品を通じて版画表現の基礎についてご紹介します。洋の東西を問わず、版画は宗教画や経典を広く普及させるために誕生したと言われています。紙の発明と印章の文化を持つ中国は印刷が最も早く７世紀から始められ、日本では８世紀の経典「百万塔陀羅尼」に端を発します。西洋は意外と遅く、15 世紀初頭の木版画（凸版）から始まり、同じく 15 世紀に銅版画（凹版）が発達、石版画（平版）は18世紀末に誕生します。一点ものの油彩画に比べて、巨匠の作品でも複数制作できる普及版として版画は人気を博しました。しかし、19 世紀に広まった写真によって、絵画全般は再現技術の座を奪われ、なかでも複数制作という利点を持っていた版画は大きな痛手を受けます。それでも、木版画の温かみ、銅版画のシャープさ、石版画の自由さなど、版画ならではの独特の魅力が見直されています。さらに、作家のサインを入れ、エディションと呼ばれる印刷枚数を限定することによって、美術品としての希少性を高め、版画は新たなジャンルとしての地位を確立しました。

カンディンスキー《小さな世界Ⅶ》
1922年　木版・紙

アンリ・マチス

《ジャズコドマ兄弟［空中ブランコ］》

1947年、ステンシル・紙、縦 42.0× 横 65.2cm

フランスの画家アンリ・マチス（1869ー1954）は、20 世紀のはじめに、フォービスム（野獣派）という新しい絵画運動を興した画家の一人です。心に感じた感覚を重視した、明るい強烈な色彩やのびのびとした雰囲気の作風で人々を驚かせました。近代美術に色彩の革命を起こしたマチスは、1920 年頃に南仏のニースを訪れたことをきっかけに、穏やかな色調による装飾性豊かな表現へと変化します。

晩年大病を患ったマチスは、ベッドの中でも創作できる切り絵と出合います。グワッシュ（不透明水彩絵の具）を塗った紙を下描きなしにハサミで切り、その紙片の色と形の響き合いを確かめながら原画をつくり上げました。はじめ「サーカス」という主題で構想が練られていましたが、制作の即興性がジャズと通じるところから、本タイトルが名づけられました。

本作は、マチスがステンシル（型紙刷り）の技法で、原画の色の再現にこだわり、切り絵に使用したものと同じグワッシュを用いて完成させた全 20 点からなる版画集のうちの一つです。